英語と日本語の物語文の時間の進行についての認知言語学的一考察

An Analysis of the Temporal Progress of Narratives in English and Japanese through Cognitive Linguistics

藤　原　正　道

実践女子大学短期大学部
紀　要　第42号　抜刷
2021年 3 月10日発行

英語と日本語の物語文の時間の進行についての認知言語学的一考察

An Analysis of the Temporal Progress of Narratives in English and Japanese through Cognitive Linguistics

FUJIWARA, Masamichi
藤　原　正　道
英語コミュニケーション学科教授

抄録：

本論は認知言語学の見地から、英語と日本語の物語文中の時間の進行について分析している。本論では英語の時間構造の特徴をそのまま日本語の分析に当てはめることはせず、それぞれの言語の特徴に沿った分析を試みている。人間の時間に対する認知能力は共通のものであるという考えを基本に、英語と日本語の物語文中の時間の進行の構造を明らかにしている。

Abstract：

This study elucidates the structure of the temporal progress of narratives in English and Japanese through cognitive linguistics. Native speakers of English and Japanese recognize time and display different temporal systems. Therefore, this study elaborates the temporal structures of narratives in English and Japanese.

キーワード：物語文、時間の進行、時間の非有界性、英語の時間把握、日本語の時間把握

Keywords：Narrative, Temporal Progress, Temporal Unbounded, Temporal Construal in English, Temporal Construal in Japanese

1　はじめに

本論の目的は認知言語学の考え方に基づき、英語と日本語の時間表現、特に物語文中の時間の流れを明らかにすることである。英語と日本語の時間の捉え方、つまり時間の認識の仕方の違いを明確にし、それぞれの言語の物語文中の時間の進行について分析していく。物語文中の時間は

常に進んでいるという認識は人間共通であるとして、時間の進行を止める要素である時間の非有界性に注目して考察を進める。

2　時間と時間把握

我々は時間を客観的で絶対的な基準だと考えがちだが、相対性理論では光の速度が絶対的な基準であり、時間は相対的である。また、Buonomano（2017）によると、空間と時間も独立的ではない。このことは認知言語学のメタファー研究では当然視されてきたことである。我々は次の（1）の例のように時間を空間に置き換えることによって、時間を認識しようとしてきた[1]。

（1）　a　The meeting continued through the night.
　　b　その国は 1 年を通じて温暖だ。

（1a）の「through」や（1b）の「通じて」は、もともとは物体が空間の中を通過することを意味するが、時間を空間に転化し、可視化できない時間を把握しようとしている。

さらに認識主体である私たちが対象の時間へ進んでいくかのような表現や、認識主体である私たちは移動せず、対象の時間の方が我々に近づいてくるかのようなメタファー表現も可能である。

（2）　a　We are approaching the day of the exam.
　　b　The day of the exam is approaching.

私たちは時間を主観的に認識し、それを言語表現として示しているにすぎない。少なくとも人の脳内ではそのように事態把握しているからこそ、メタファーとして言語表現可能であると言える。

加えて、我々は時間を常に進んでいると認識している。その証拠に次の英語と日本語の例をみてみよう。

（3）　a　July 19th was her birthday; the next day I met her.
　　b　7 月 19 日は彼女の誕生日だった。次の日、彼女と会った。

（3a）の「the next day」は 7 月 20 日であり、7 月 18 日という解釈はない。（3b）も同様である。時間が一方向に進んでいる証拠である。

我々の頭の中では時間は常に動いており、止まってないことが常態であると考えられる。しかしながら、英語、日本語ともに物語文の中で、時間が進行していないと認識する場面があることも確かである。そこにはどのような時間把握の認知機能が働いているのであろうか。

3　英語と日本語の時間についての認識

3.1　英語の時間把握

英語は認知主体である話し手が認知の場の外にいて、事態を把握する傾向が強い。次の例を見てみよう。

(4)　a　I am happy.
　　b　Where am I?

(4a) は認識主体である自分の幸福な感情を表している。日本語話者から見れば、自分の感情は話者が一番よく実感しているはずなので、わざわざ「I」を明示する必要を感じない。しかしながら、英語では認知主体の話し手が認知の場から離れた外側におり、自らを外から眺めている、つまり自らを客体化しているように表現している。

また、(4b) では道に迷っている状況であり、もし聞き手がいない独り言の場合でも、「I」が明示される。このことは英語の事態把握の場合、認識者が直接事態と対峙せず、事態の外側から全体を眺めているかのように認識するからである。

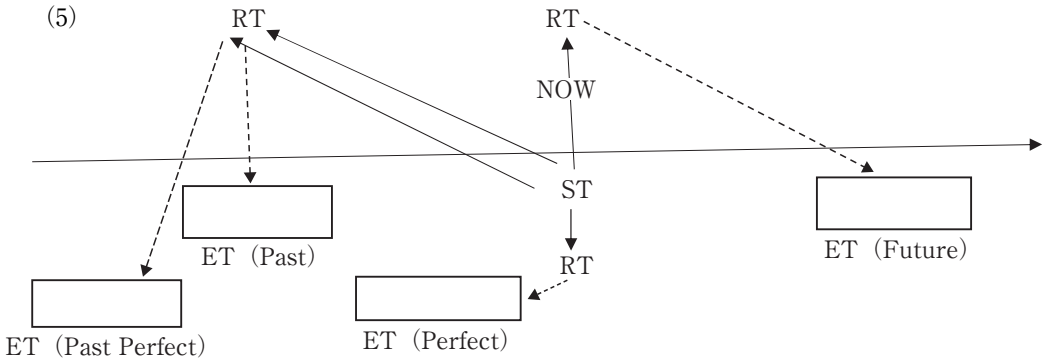
中村（2019）ではこのような事態把握を D モード（Displaced mode of cognition）と呼び、この事態把握の仕方が西洋的文脈では、「客観的」だと考えられていると述べている[2]。

さて、このような事態把握は英語の時間に対する認識にも影響を与えている。英語の時間把握は時制という文法形式により、認知主体である話者は時間的な視点である参照点（Reference Time：以下 RT）を通じて、事態の時間を把握する。

例えば過去の事態を表す場合、発話時（Speech Time：以下 ST）から RT は距離を取る。認知主体である発話者は、時間的参照点 RT の位置から対象の事態が生じた時間（Event Time：以下 ET）を眺めることになる。よって、発話者は対象の事態を発話時から離れた場所（RT）の位置から対象の事態の全体像を認知可能となる。

また、英語の場合、have-en という文法形式によって、対象となる事態の時間（ET）から時間参照点（RT）が離れ、RT までの継続した事態を表すことができる。英語の時制構造を図示すると、次のようになる。

(5)



ST から直接 ET を眺めるのではなく、RT を経由してから事態が生じた ET を特定する時間把握は、認識主体が事態と直接対峙しない D モードで事態把握を行う認知方法と類似している。

3.2　日本語の時間把握

日本語は英語とは異なり、話し手と聞き手が同じ認知の「場」を共有し、認知主体（や聞き手も）が背景化されるような事態把握をする。「私」や「あなた」がしばしば省略されることや上記の（4b）の日本語版（6b）の場合、主語の省略というよりも、主語を明示すると非文になる。

(6)　a　幸せ♡
　　b　ここはどこ？

(6a）では主語を明示しなくとも、認知主体は話者である「私」であると分かる。(6b）では話し手を明示することはむしろ不可能である[3]。つまり、認知主体は明示されずに背景化されている。このような事態の把握の仕方は、発話者が自分を客体化することなく、聞き手と同じ言語認知空間を共有しているので可能な表現と言える。

中村（2019）では上記の日本語型の事態把握を I モード（Interactional mode of cognition）と定義している[4]。

日本語の時間把握も I モード的である。英語の時間把握を表した文法形式である時制は、話し手の時間の視点が認知対象の事態を時間軸上から離れ、RT を経由して事態が生じた ET を把握する。しかしながら、日本語の時間把握は英語とは異なる。

(7)　a　はっけよい残った、残った。
　　b　やっと、着いた。
　　c　ここにあった。
　　d　さあ、買った、買った。
　　e　明日、現代文のテストだった。　　中野（2017: 208-209）

(8)　a　日が昇る。

b　毎朝５時に起きる。

c　旅に出る。

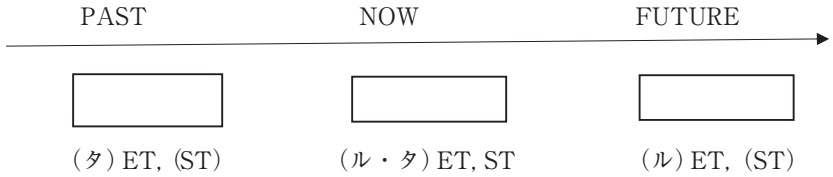
日本語の助詞「タ」や「ル」は過去や現在（未来）という時間を表すだけでない。過去を表すことも多い「タ」でも英語の完了に当たる（7b, c）や（7a, d, e）のように未来の事態を表すことができる。「ル」に関しても（8）のように現在だけでなく、恒常的な状態や反復する習慣を表す（8a）や（8b)、そして（8c）のように未来の事態を表すこともできる。

中野（2017）で指摘されているように、日本語は英語のような文法形式の時制が存在しない。中野（2017）は話し手と聞き手がイマ・ココという認識を共有し、同じ言語認知時間を共有していると指摘している。つまり、日本語話者はRTを経由せず、STから直接ETの時間を把握しているといえる。

また、中野（2017）は日本語の場合、特に物語文中で聞き手（読者）に時間の位置や話し手の位置を伝えるのは、自らが知覚しているものを同時に他者に知覚させる共同注意という認知能力が働いているからであるとしている。

以上の日本語の特徴は次の（9）のように図示できる。日本語話者は実際に話をしている時点（NOW）を基準にしているが、過去や未来を表す場合も対象の事態に対し、聞き手（読者）とともに事態の内部から把握しているので、ETと同時を表すものとして（ST）と表記している。

(9)



日本語の時間把握を無理矢理、英語の時間把握の仕方へと押し込めたとしても、正しい理解は望めないだろう。ただ一方で、認知能力という人間共通の基準を用いて比較することで、それぞれの言語の認知の違いが明確になり、時間の把握の仕方やそれが表れる時間表現の内部構造が理解可能となることも重要なことであると考え、分析を続けていく。

3.3　物語文の時間の進行

私たちは物語文の中の時間を常に進むものと認識している[5]。原則、提示される事態の順番に物語が進み、時間も進んでいく[6]。

一方で、時間が進んでいないと認識する部分にはどのような特徴があるのだろうか。1つは状態動詞にあると言われている。(Couper-Kuhlen（1987/1989)）状態動詞は表される事態の開始点や終了点が明示されず、物語中のある時点に特定された事態を表さず、過去へも未来へも拡大可能な事態を表すことができる。そのような動詞が使われた場合は、物語中の時間は進行しない[7]。

しかしながら、藤原（2012）で示したように状態動詞の存在だけで、我々は時間の停止を認識するわけではない。時制や副詞、接続詞など様々な要素が組み合わされるので、状態動詞は物語中の時間の進行を止める１つの要素でしかない[8]。

加えて、上記の 3.1 や 3.2 で分析したように、英語と日本語はそもそも時間把握の仕方が異なるので、物語文中の時間の進行・停止の条件も異なるはずである。

話し手（必ずしも実際の話し手ではないが）の意図を聞き手（読者）が一緒になって、理解しようとしているという認識のもと、物語文の時間は未来に向けて常に流れると認識されるとする。

さらに物語文中の時間が止まっているように認識される場合、事態の時間が非有界、つまり対象の事態の起動点も終了点も認識できないとする。加えて 3.1 や 3.2 の英語と日本語の時間把握の認識に基づいて、それぞれの物語文中の時間の進行について分析を行う。

3.3.1　英語の物語文の時間の進行

3.1 の（5）のように英語では RT を基準に時間を認識し、物語の時間の進行は RT の進行に依存している。次の（10）の物語の時間の進行について分析してみる。

（10）　She tottered out onto her porch at twenty to eleven on the morning of July twentieth, carrying her coffee and her toast with her as she did every day that Coca-Cola thermometer outside the sink window read over fifty degrees. It was high summer, the finest summer Mother Abagail could recollect since 1955, the year her mother had died at the goodish age of ninety-three. Too bad there ain't more folks around to enjoy it, she thought as she sat carefully down in her armless rocking chair. But did they ever enjoy it? Some did, of course; young folks in love did, and old folks whose bones remembered so clearly what the death-clutch of winter was. Now most of the young folks and old folks were gone, and most of those in between. God had brought down a harsh judgment on the human race.

（Stephen King（1990）*The Stand*（English Edition）: 559）

（10）の物語中の時間の流れは下記の（10'）と分析可能で、（10"）のような時間構造をしている。「---」は時間が離れていることを、「 , 」や「 | 」は前文と同時を表し、時間が進行していない。「>」は時間の進行を表す。ST は話者が物語を話していると仮定している時間で、（ST）は話者がその時間から離れて、物語文中での NOW と認識される時間を表している。

（10'）　a　「tottered out on her pouch」がこの段落の時間の基準（RT）、つまり物語の話し手の過去であり、事態の具体的な発生時（ET）は「at twenty to eleven on the morning of July twentieth」となる。次の「carrying her coffee ...」も現在分詞の含意から、主節の表す時間と同時となる。

b 「It was high summer」は気候を表し、be 動詞の語彙的意味から時間的有界性は認められないので、前文の RT と同時となり、物語の時間は進んでいない。

c 「had -en」は事態（ET）が前文よりさらに以前の出来事を表し、基準時（RT）自体は前文と同時である。また「thought」は「as she sat carefully down in her armless rocking chair」と同時間を示す。「sat carefully down …」は開始点という時間的有界性を含意するため、物語の時間は進む。

d 「Too bad there ain't more folks around to enjoy it」は彼女の思考内を表し、「thought」の RT（ET も）と同時である。さらに「enjoy」は認知主体の思考内の事態なので、時間的有界性はなく、前文と同時で、物語は進行しない。

e 「Now」は前文の RT を基準にした物語中の現在であり、「were gone」はその RT より以前の事態の ET である。

f 「had - en」は前文の RT を基準にして、ET は前文より以前の出来事を示す。

(10") a ET, RT ---------- ST
tottered
at twenty to eleven on the morning of July twentieth

b ET, RT
it was high summer

c ET------ RT
1955

d >ET, RT
thought
enjoy

e ET ------- RT(ST)
were gone NOW

f ET ------- RT
had brought down a harsh…

英語の時間把握の場合は D モードのように認識主体は RT を介して事態を把握していることもあり、事態全体を把握しやすいと分析できる。過去時制で表される事態は認識主体が事態を外側から見る、つまり事態の開始と終わりを把握しやすい。加えて、他動性（Hopper and Thompson（1980））が高く、事態の有界性も日本語に比べて明確である。

英語の時制とは異なり、日本語の時間把握は話し手が聞き手とともに事態と同時である傾向、つまり ST と ET が同時である傾向が強い。さらに、RT のような時間の参照点を経由せずに時間把握をしている。日本語の物語文中の時間の進行は RT ではなく、ET を基準に進行していく。

3.3.2 日本語の物語文の時間の進行

中野（2017）が指摘するように、現代日本語の物語文では読者（聞き手）は語り手（話し手）

と共同の「場」と「トキ」である「イマ・ココ」を共有するが、話し言葉とは異なり、物語文中には時間の概念が存在する。「タ」は話者（作者）が話をしている（書いている）より前の時間に起きた事態を表すことが可能である。また「ル」は物語中の話者（と読者）の「イマ・ココ」が現れた部分と言える。

（11）　聞こえてくる言葉が抽象的で、意味やイメージをつかむのが難しい。混濁した世界、乳児、元の世界、音楽、脈絡がなく、意味を考えイメージをつかもうとすると、それが本当に母の声なのかどうか、曖昧になってきた。声の質や抑揚、言葉の選び方など特定できないし、特定しようとすると力が失われていく。ただし、その脱力は、奇妙なことに気持ちよかった。誰の声だろうが関係ないという風に投げやりになったわけではない。声や顔や記憶を特定することから解放されていくような気がしたのだ。

（村上龍（2020）『Missing 失われているもの』: 1374-1375）

（11’）　a 「難しい」は状態を表し、時間の有界性の含意はない。

b 「曖昧になってきた」の「なってくる」は事態の終了点が明らかで、「タ」形による過去の意味から時間の有界性が示され、物語の時間が進行する。

c 「特定できないし」は終了点が含意され、時間の有界性がある。

d 「失われていく」は終了点が含意され、物語内の時間は進む。

e 「気持ちよかった」はある時点での状態を表し、時間の有界性はなく、時間は進行せず、前文と同時。

f 「投げやりになったわけではない」は前文の感情の説明。時間は有界はなく、物語は進行しない。

g 「気がしたのだ」の「のだ」は登場人物の気持ちの確認で、時間的な有界性はない。よって、時間の進行はない。

（11”）

```
a   ET,（ST）
    難しい
b     > ET ---------- ST
      曖昧になってきた
c       > ET,（ST）
          特定できない、
d         > ET,（ST）
            失われていく
            |
e           ET ---------- ST
            気持ちよかった
            |
f           ET,（ST）
            投げやりになったわけではない
            |
g           ET,（ST）
            気がしたのだ
```

(11) と同じように、次の (12) と (13) の例も分析していく。

(12) 周囲は、緑に覆われていて、押し入れのような場所から、外に出たことはわかるが、どこにいるのかは不明だ。だが、自分がどこにいるのかわからなくても良いと感じることができた交差する光の束も、ぐにゃぐにゃとして折れ曲がったり天地が分からないエスカレーターのようなものもない。今見ている景色には不安を覚えない。逆に、安らぎのような気配が伝わってきて、不安がる必要はないという信号が風景の向こう側から届いている気がするが、わたしはそのことに戸惑っているようだ。ずっと不安と混乱の中にいたせいだろうか。安らぎという言葉の意味は理解できるが、それが具体的にどんな精神状態なのか、曖昧になっている。その人物が誰なのかはわかるが、はるか彼方にいて点にしか見えない、そんな感じだ。

(村上龍 (2020)『Missing 失われているもの』: 1794-1795)

(12') a 「緑に覆われていて」 は「押し入れのようなところ」や「外に出た」との対比で、認知主体は空間の移動を認識しており、それに伴って時間の進行も起こる。さらに「外に出たことは分かる」は終了点を含意しており、時間の有界性がある。そして「さらに不明だ」は状態を表し、時間的に非有界であり、前文と同時となる。

b 「感じることができた」の「できた」はその時点での話者の内面での可能性を示し、時間の有界性はなく、物語は進行しない。

c 「ものもない」は事態の状態を表し、時間の有界性を含意しない。よって、時間を進めない。

d 「不安を覚えない」は主人公の内面の感情を表し、時間の有界性はなく、前文と同時。

e 「戸惑っているようだ」の「ようだ」は推測を表す内面感情であり、時間の境界は示されない。よって、時間は進行しない。

f 「せいだろうか」も上記 (12'e) と同様に同時で、物語の時間は進行しない。

g 「理解できる」「曖昧になっている」は時間的有界性がなく、前文と同時。やはり物語の時間は進行しない。

h 「感じだ」も (12'g) と同様で時間の進行はなく、前文と同時。

(12") a ET(ST)
押し入れのようなところ

> ET ---------- ST
緑に覆われていて、
|
ET ---------- ST
外に出たことは分かる

|
ET,（ST）
不明だ
|
b　ET ---------- ST
感じることができた
|
c　ET,（ST）
ものもない
|
d　ET,（ST）
不安を覚えない
|
e　ET,（ST）
伝わってきて、
|
ET,（ST）
気がする、
|
ET,（ST）
戸惑っているようだ
|
f　ET,（ST）
せいだろうか
|
g　ET,（ST）
理解できる、
|
ET,（ST）
曖昧になっている
|
h　ET,（ST）
そんな感じだ

（13）一人で簡単な夕食を済ませたあと、ジョニ・ミッチェルの古い LP を久しぶりに聞きながら読書用の椅子に座ってミステリー小説を読んでいた。それは私の好きなアルバムだったし、私の好きな作家の新刊だった。しかしなぜか気持ちが落ち着かず、音楽にも読書にももうひとつ意識を集中できなかった。録画しておいた映画でも見ようかと思ったが、見たい映画がひとつも見当たらなかった。そういう日がたまに巡ってくる。自由な時間があり、何か好きなことをしようと思っても、何をすればいいのかうまく思いつけない。やりたいことは数多くあったはずなのに…。そして何をするともなく部屋をうろうろしているうちに、そうだ、たまにはスーツでも着てみようかという気持ちになった。

（村上春樹（2020）『一人称単数』: 2290）

（13’）a「夕食を済ませたあと」は「済ませる」と接続詞「あと」により、それ以前の事態より次の事を示し、物語の時間を進めている。「聞きながら」の接続詞「ながら」が事態の同時を表し、後続の事態と同時。さらに「椅子に座って」の「座る」自体は時間の有界性を含意しているので、時間を進める。そして「て」は次の事態と同時間を示す。次に「読んでいた」の「いた」は進行中の事態を表し、時間は非有界であり、「座って」と同時である。

b 「落ち着かず」は認知主体の体験している感情であり、時間的非有界性を示す。また、「できなかった」は否定ではあるが、「タ」形によって、時間的終了点が示されている。

c 「見ようかと思ったが」は語彙に開始点が含意される。「見当たらなかった」は語彙的意味として事態の終了点が示される。

d 「巡ってくる」は習慣や過去に経験した現象で、英語の過去完了のように前文よりさらに以前の事態を表している。

e 「思っても」や「思いつけない」は前文（13'd）の説明をしており、時間的な有界性はなく、物語の時間は進行しない。

f 「あったはずなのに…」少し前からその時点までの継続的な時間を表している。

g 「そして…うろうろしているうちに」の「そして」が（13'c）より先の事態を表し、時間を進行させている。そして「気持ちになった」は「タ」形とともに「なる」は事態の終了点を含意するため、時間の有界性を示し、物語が進行する。

(13") a ET,（ST）
夕食を済ませたあと

>ET,（ST）
聞きながら
|
ET,（ST）
座って
|
ET,（ST） ---------- ST
読んでいた
|
b ET,（ST）
落ち着かず

>ET ---------- ST
できなかった

c >ET ---------- ST
見ようかと思った

>ET ---------- ST
見当たらなかった
|
d ET----------> （ST）
巡ってくる |
|
e ET,（ST）
思っても 思いつけない
|
f ET----------> （ST）
あったはずなのに…

g > ET,（ST）
うろうろしているうちに
|
ET,（ST）
気持ちになった

(11)-(13) とその時間構造及び、物語の時間の進行から言えることは英語と異なり、日本語の時間把握は RT を介さないので、話し手が事態に直接向かい合うような認知をする。ST が固定されず、自由に移動可能である。また、日本語の「ル」形と「タ」形は英語の時制のように発話時を基準とした文法形式ではない。それだけでは時間的境界が明確に出ないので、語彙の持つ意味から開始点や終了点という時間の境界が生じ、物語文の時間が進行している。

4　おわりに

英語と日本語の時間把握の認識の違いを基本に、物語文中の時間の進行、特に時間を止める要素に注目して分析を行ってきた。

英語の物語文中の時間は時間の参照点である RT を基準にして、事態の時間の非有界性によって進行しなくなる。一方、日本語の物語文中の時間は RT を基準としない。ET と ST の関係や ET の時間の非有界性によって時間が停止する。話し手と聞き手が同時間を占めることが多い日本語では語彙の含意によって、非有界性が決る傾向にあるが、英語に比べて他動性、つまり時間の開始点や終了点が明確でない日本語の物語の時間の進行は、英語とは異なっている。

日本語の物語文では多用され、英語でも歴史的現在用法として知られる現在形を用いた物語文の時間の進行については今後の研究課題となる。

〔注〕

1　本多（2019）は空間から時間への転化だけでなく、時間から空間へ転化されるメタファーの存在も明らかにしている。
2　客観という名の「主観」であるとも言える。
3　「私はどこにいるのか？」という全く別の表現になる。
4　中野（2017）では I モードのような事態内部に認知主体が入り込み、聞き手と同じ「場」で事態を認識することを PA（Primordial and Assimilative Mode）モードとしている。
5　もちろん頭の中では自由に時間の移動も可能である。
6　過去完了を用いて、順序を並べ替えることも可能である。
7　状態動詞が使われても、段落の変更や時間や空間を表す副詞が共起することによって、物語中の時間は進む。
8　物語文中の時間の進行には、次の(i)の要素が関係していると考えられる。
　(i)　a　動詞の語彙アスペクト（動作・状態）
　　b　動詞とその項（動作主・被動者）の関係
　　c　時制（過去「タ」・非過去「ル」）
　　d　相（*have-en*／*be-ing*、「テイル」）
　　e　動作主の意志性（意志的・非意志的）
　　f　肯定（肯定・否定）
　　g　叙法（現実・非現実）
　　i　時の副詞
　　j　時の接続詞

〔引用文献〕

村上春樹（2020）『一人称単数』文春 E-BOOK.
村上龍（2020）『Missing 失われているもの』村上龍電子本製作所.
Stephen King（1990）*The Stand*（English Edition）, Hodder & Stoughton.

〔参考文献〕

Carlo Rovelli (2017) *The Order of Time*, Penguin Books（冨永星訳『時間は存在しない』NHK 出版）.
Couper-Kuhlen, Elizabeth (1987) "Temporal Relations and Reference Time in Narrative Discourse", Alfred Schopf (ed.) *Essays on Tensing in English Vol. 1: Reference Time, Time, Tense and Adverbs*, 7-26, Max Niemeyer.
Couper-Kuhlen, Elizabeth (1989) "Foregrounding and Temporal Relations in Narrative Discourse", Alfred Schopf (ed.) *Essays on Tensing in English Vol. 2: Time, Text and Modality*, 7-30, Max Niemeyer.
Dean Buonomano (2017) *Your Brain is a Time Machine The Neuroscience and Physics of Time*, Norton（村上郁也訳『脳と時間　神経科学と物理学で解き明かす時間の謎』森北出版）.
Evans, Vyvyan (2003) *The Structure of Time: Language, meaning and temporal cognition*, John Benjamins Publishing Company.
藤原正道（2012）「英語と日本語の物語の進行と時間の認知に対する一考察」『実践短期大学紀要』33 号，1-12.
藤原正道（2013）「英語話者と日本語話者の時間把握についての一考察」『FLC ジャーナル』第 8 号，71-78.
樋口真理子（2000）「ル・タ・テイルの意味機能試論：認知文法の見地から」『九州工業大学情報工学部紀要』第 13 号人文・社会学編，1-40.
樋口真理子（2001）「日本語の時制表現と事態認知視点」『九州工業大学情報工学部紀要』第 14 号人文・社会学編，53-81.
Higuchi Goto, Mariko (2019) "Habitual Progressives and Stativity" *Journal of Cognitive Linguistics Vol. 4*, 12-34, The Japanese Cognitive Linguistics Association.
Hopper, Paul J. and Sandra A. Thompson (1980) "Transitivity in Grammar and Discourse," *Language* 56, 251-299.
岩崎真哉（2017）「英語の時間メタファー再考」中村芳久教授退職記念論文集刊行会編『ことばのパースペクティブ』222-232，開拓社.
岩崎真哉（2019）「時間メタファーを考える　主体性との関連から」鍋島弘治朗他編（2019）『メタファー研究 2』79-100，ひつじ書房.
古賀悠太郎（2018）『現代日本語の視点の研究』ひつじ書房.
工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト　現代日本語の時間の表現』ひつじ書房.
本多啓（2005）『アフォーダンスの認知意味論　生体心理学から見た文法現象』東京大学出版会.
本多啓（2019）「時空間メタファーにおける時間概念の多重性について」鍋島弘治朗他編（2019）『メタファー研究 2』125-146，ひつじ書房.
森田良行（2006）『話者の視点がつくる日本語』ひつじ書房.
鍋島弘治朗他編（2019）『メタファー研究 2』ひつじ書房.
中村芳久（2019）『認知文法研究：主観性の言語学』くろしお出版.
中村芳久教授退職記念論文集刊行会編（2017）『ことばのパースペクティブ』開拓社.
中野研一郎（2017）『認知言語類型論原理 「主体化」と「客体化」の認知メカニズム』京都大学学術出版会.
Reichenbach, Hans (1947) *Elements of Symbolic Logic*, Free Press.
Reichenbach, Hans (1956) *The Direction of Time*, Dover.
碓井智子（2008）「時間認知モデル　7 つの普遍的特性と 6 つの時間認知モデル」山梨正明他編（2008）『認知言語学論考 No. 8』1-80，ひつじ書房.
山梨正明他編（2008）『認知言語学論考 No. 8』ひつじ書房.